

# 「アセアンにおける、若者のコンピューター事情」

安平 明彦

(ヤマハ発動機株式会社 MC 事業本部マーケティング統括部 商品企画室 アセアン Gr.)



## 1. はじめに

東南アジア諸国(以下アセアンと表記)におけるオートバイの位置づけと、その使用実態は近年、若者を中心として変化が başlamっており、今回のレポートではその実態について、紹介する。

アセアンのオートバイは、人々の日常生活の足として、幅広い用途、地域で生活に密着しているが、その殆どは日本の二輪車メーカーが現地で製造しているオートバイである。タイプは大きく三つのカテゴリーに分類されるが、まずは、その種類を説明しながら生活との関わりや使われ方を紹介していく。

## 2. カテゴリー

最も多いのは “アンダーボーン型フレームモーターサイクル” (以下アンダーボーンと表記)※1 と呼ばれるタイプである。100cc~125cc の 4 ストロークエンジンで、4 速の変速ギアを装備し、クラッチ操作無しでシフトペダルを踏むだけでギアチェンジが出来る、操作が簡単な、且つ、耐久性と燃費に優れたモデルである。また、前後のタイヤサイズが 17 インチという点もアンダーボーンの特徴である。アセアン地域では農村地方や山間部などでは舗装がされていない道路がまだまだ多く、この大径のタイヤのもたらす、凸凹道での高い走破性と安定性は大きな安心感に繋がっている。この大きなタイヤにも関わらず、フレームの形状が、乗り降り時の足の跨ぎ易さを考慮してデザインされているのも、もう 1 つの特徴である。車体の背骨にあたる部分が車体の下を通っていることから、“アンダーボーン”と呼ばれており、この“アンダーボーン”フレームに、前後長の長い乗車シートが装備されている点も、“アンダーボーン”のもう一つの特徴となっている。

アセアンの人々の間では、家族の足として家族全員で乗ることも珍しくなく、アセアンの至るところで二人乗りは元より、三人乗り、四人乗りを目にすることもしばしばである。四輪車はまだまだ高価な乗り物で、一般的な市民の足としてはまだまだ普及が進んでいないのが現状であり、そのような状況で “アンダーボーン”の利便性、汎用性、経済性が多くのアセアンの人々に支持されていることが、その背景としてあげられる。



Fig.1, Yamaha T110

※1. ヤマハ発動機の代表的アンダーボーン T110(Jupiter) : 4 サイクル 単気筒 110cc  
インドネシア、タイ、ベトナム、マレーシア等  
アセアン諸国で広く使われている人気モデル。



Fig.2. ベトナム街中風景

※左記写真はベトナムのホーチミン  
市内のオートバイが走っている風景



Fig.3. インドネシア街中風景

※左記写真はインドネシアのジャカルタ市内  
での交差点での信号待ちの風景。

次に“一般的モーターサイクル”※2 と呼ばれるタイプである。2 ストローク、又は 4 ストロークの 100~250cc のエンジンで、日本でも走っているモーターサイクル同様に、燃料タンクを膝で挟んで乗る、スポーツタイプのオートバイである。スポーツモデルといえども、日本やその他、先進諸国のように趣味材としては無く、あくまで生活の足として使われているのもアセアンの特徴といえるが、近年は急激に減少している。

かつては、アンダーボーンよりもスピードが出て、高速走行でも安定していることから、より長距離の移動を必要とする人々の生活の足として使われていたが、公共交通機関の整備や自動車保有台数の増加によって、長距離の移動用として “一般的モーターサイクル”を必要とする人々が減っていることが、このタイプの減少の理由と考えられる。

(C)YAMAHA MOTOR CO.,LTD.



Fig.4, Yamaha SX225

- ※ 2. ヤマハ発動機の代表的モーターサイクル  
SX225(Scorpio) :  
4 サイクル 単気筒 225cc  
インドネシアで生産、販売されている  
上級モーターサイクル。

三つ目が、近年最も市場拡大が著しい “オートマチックアンダーボーン型フレームモーターサイクル”（以下オートマチックアンダーボーンと表記）と呼ばれるタイプである。日本でも見かけるスクーターと同じように、エンジンは無段 CVT の変速機構を備え、変速機構とエンジンが一体となって後輪と共にフレームに懸架されるユニットスイングと呼ばれる構造はスクーターと同じである。

従って、広義の意味ではスクーターの一種であると言えるが、あえてここで、“オートマチックアンダーボーン”と呼んでいる理由について説明する。日本やその他、先進国で走っているスクーターとの最大の違いは、この“オートマチックアンダーボーン”がアセアン地域特有の気候に対応しているという点である。雨季と乾季が存在するアセアン地域では、雨季には、至る所で道路が冠水してしまう程のスコールが発生する。

既存のスクーターではタイヤが 10~12 インチの小径タイヤであるが故に、スコールで冠水した道路では、エンジンが水に浸かってしまい、最も水面に近い CVT 変速機構が特に大きなダメージを受けてしまう。このような状況の中では、耐久性と信頼性が求められる生活の足としては、既存のスクーターが市民権を得る事は困難だったのである。

これに対して、冒頭で紹介した“アンダーボーン”は、17 インチの大きなタイヤで、地面からエンジンまでのクリアランスを確保して、冠水した道でも走破できるという点で、アセアン地域にマッチしている。この特徴を継承しつつ、オートマチック化した商品が 2001 年にヤマハ発動機がアセアン地域に導入した“オートマチックアンダーボーン”第一号となる NOUVO(ヌーボー)である。前後 16 インチの大径タイヤを装備し、CVT 機構への水入りに対しても十分に配慮されたモデルとして、“アンダーボーン”の特徴を継承している。もうひとつの特徴は、“アンダーボーン”と同様の長いシートを装備している点も、従来のスクーターとは一線を画した位置づけとして、家族の足、みんなで乗れるオートマチックとして、市場で受け入れられ始めている。

(C)YAMAHA MOTOR CO.,LTD.



Fig.5, Yamaha NOUVO

- ※ 3. ヤマハ発動機のオートマチックアンダーボーン  
AT115( NOUVO) : 4 サイクル 単気筒 115cc

写真は 2004 年に発売された二代目 NOUVO

### 3. オートマチックアンダーボーンの拡大

ここまでの話で、アセアン地域ではオートバイが通勤用として、幅広く使われていることをご理解頂けたと思う。

『通勤用 = 家族の足』というのが、これまでのアセアンでのオートバイの位置づけであったが、上述した“オートマチックアンダーボーン”の拡大で、アセアン各国の若者の間で変化が始まっている。それは、単なる“家族の足”としてだけのオートバイではなく、“オートマチックアンダーボーン”が、個性化の進む若者の間でのファッションアイテムのひとつとして位置づけられ始め、そして、それが若者の間で拡大する要因のひとつとなり始めた点である。

雨季で雨が多いアセアン諸国では、オートバイに乗っている人は靴の汚れを気にして、サンダルで乗る人が多く見受けられてきた。しかし、オートマチックモデルは、足でシフトチェンジする必要が無く、フットボードを装備している為、汚れに対するプロテクション機能の高さと足の自由度が“アンダーボーン”よりも優れている。

これによって、汚れを気にせずお洒落な靴が履ける、女性はハイヒールを履いたままでも運転しやすい、といったファッションの自由度の高さから、若者の自己主張のアイテムとして“オートマチックアンダーボーン”が受け入れられ始めた。

この流れに更に拍車をかけたのが、2003 年に導入した“オートマチックアンダーボーン”第二号となる MIO(ミオ)である。初代の NOUVO よりも少しコンパクトな車体で、14 インチのタイヤサイズと、スクーターと同じステップスルータイプのフラットフットボードにより、スカート履いた女性でも乗り降りしやすいと評判である。もちろんアセアンで求められる“アンダーボーン”の走破性は当然、配慮されている。

※ 4. ヤマハ発動機のオートマチックアンダーボーン

AL115( MIO) : 4 サイクル 単気筒 115cc

写真は 2003 年に発売された初代 MIO



Fig.6, Yamaha MIO



Fig.7, Yamaha MIO ユーザー

※左記写真はインドネシア、バリ島で MIO を使用している女性ユーザー。

小柄な女性でもスカート履いて、ハイヒールのまま乗れる。お洒落を意識する若い女性にとって、これほどまでにマッチするオートバイはアセアンには無かったという評判で、瞬間に女性に支持され始めた。一方で、車体サイズの大きさから、NOUVO は男性のファッションアイテムとして、自己表現のツールとして、受け入れられ始めている。若者達は如何に人と違って見せられるか、という点で人との差別化を意識し始め、ショーオフを意識したモデファイも始まっている。こうなってくると、“オートマチックアンダーボーン”がトレンドの最先端であるという意識が、若者の間で広がり、ファッションアイテムとして、様々な広がり見せ始めている。

#### 4. おわりに

これまで、アセアンのオートバイは、通勤用として、一家に一台の家族の足であったが、これから経済成長が進むにつれて普及が進み、近い将来、一人に一台という時代もそう遠くはないかもしれない。そんな時代に向けて、ファッションアイテムとしての“オートマチックアンダーボーン”がどのような進化を迎えるのか、非常に興味深く観ていきたい。

もしかすると、まだ先進国でさえ、お目にかかれぬような形態のオートバイに進化していくかもしれないと思うと、今後のアセアン市場から目が離せない。どうかオートバイ先進国の日本のみなさんも注目して頂きたいと思う。



Fig.8, Yamaha MIO ユーザー

※左記写真はインドネシア、タイ、マレーシア、ベトナム等で見られる若者のファッションアピールとしてのモディファイ車両



Fig.9, Yamaha NOUVO



Fig.10, Yamaha NOUVO